



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

November 30, 2016, No. 41

【役員名簿(2016年11月現在)】(五十音順)

代表：結城 正美 (金沢大学)
副代表：小谷 一明 (新潟県立大学)
顧問：上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)
西村 頼男 (阪南大学名誉教授)
事務局長：高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
事務局補佐：
辻 和彦 (近畿大学)
浜本 隆三 (福井県立大学)
会計：大野 美砂 (東京海洋大学)
河野 千絵 (日本大学・非)
監事：村上 清敏 (金沢大学名誉教授)
ニュースレター編集委員：
浅井 千晶 (千里金蘭大学)
豊里 真弓 (札幌大学)
巴山 岳人 (和歌山大学・非)
会誌編集委員：
Bruce Allen (清泉女子大学)
黒崎 真由美 (関東学院大学)
塩塚 秀一郎 (京都大学)
芳賀 浩一 (城西国際大学)
波戸岡 景太 (明治大学)
コンピューターセンター：
岩政 伸治 (白百合女子大学)
北国 伸隆 (明治大学・院)
山城 新 (琉球大学)
評議員：相原 優子 (武蔵野美術大学)
池田 志郎 (熊本大学)
石幡 直樹 (東北大学)
太田 雅孝 (大東文化大学)
上岡 克己 (高知大学名誉教授)
茅野 佳子 (日本大学・非)
塩田 弘 (広島修道大学)
管 啓次郎 (明治大学)
高橋 龍夫 (専修大学)
高橋 勤 (九州大学)
高橋 昌子
巽 孝之 (慶応義塾大学)
中川 僚子 (聖心女子大学)
林 直生 (滋賀大学)
平塚 博子 (日本大学)
横田 由理 (大東文化大学・非)
吉田 美津 (松山大学)
院生代表：戸谷 洋志 (大阪大学・特)
広報：喜納 育江 (琉球大学)
塚田 幸光 (関西学院大学)
松永 京子 (神戸市外国語大学)
研究助成：岡島 成行 (青森山田学園)
管 啓次郎 (明治大学)
乳井 昌史 (早稲田大学)
野田 研一 (立教大学名誉教授)
山里 勝己 (名桜大学)
結城 正美 (代表)

アジアとエコクリティシズム

代表 結城 正美 (金沢大学)

ここ数ヶ月の間にアジアでエコクリティシズムに関する新しい動きがありました。そのいくつかを紹介します。

まず、8月初旬にASLE-ASEANが誕生しました。アジアでのASLE設立は、日本、韓国、インド、台湾に次いで五番目です。シンガポール国立大学を会場に、シンガポール、フィリピン、タイなどASEAN諸国から50名以上が参加した設立記念ワークショップでは、二日間にわたって30もの研究発表がありました。使用言語は英語です。参加者が何の問題もなく英語で議論したり歓談したりする様子を目の当たりにし、なんと伸びやかな研究交流だろうと感銘を受けました。ご存知のとおり、東アジアでもASLE-Japan、ASLE-Korea、ASLE-Taiwanが国際シンポジウムを持ち回りで開催しており、これを書いている数日後に第5回シンポジウムがソウルで開催される予定ですが、東アジアの連携では常に言語の壁が問題になります。無論、言語の違いは、会員同士の翻訳・通訳の相互支援につながることもあるので、一概に「壁」になっているとは言えませんが、英語使用環境が整っているASLE-ASEANの状況は、北欧がそうであるように、異文化間の協働環境における共通言語の重要性を実感させるものでした。それから、ASLE-ASEANの会員は英米文学者が多い点では東アジアのASLEと相似しているものの、英文学を専門とする人たちが英語圏文学ではなく自国の文学をエコクリティシズムの方法論を用いて論じる発表が多いのが特徴的でした。設立年に20年以上の開きがあるので当然かもしれませんが、ASLE-Japanの活動が米英の動きの紹介から始まったのに対し、ASLE-ASEANでは設立においてすでに比較研究的なスタンスが明確であることが深く印象に残りました。

次に、7月末に国際シンポジウム「文化に媒介された環境問題：東アジア関係学のエコロジー的探究」が名古屋大学で開催されました。本学会員も登壇することからメーリングリストに案内があり、聴きに來られた会員が何人もいらっしゃいました。名古屋大学大学院文学研究科附属「アジアの中の日本文化」センターと浙江大学が企画し、ハーバード・イェンチン研究所が後援という大規模な国際シン

ポジウム。日本、台湾、韓国、オーストラリアをはじめ各国から分野や世代の異なる研究者が集まり、研究発表とディスカッションが二日間にわたって繰り広げられた会議は、発表時間一人一時間、ディスカッションにもたっぷり時間が用意され、実質的な議論を促す環境が整備されたものでした。プログラム冒頭に記されていることば——「環境問題に対して私たち人類は何を介してどのように感じ、想像し、認識し、行動してきているのか。アントロポセンと言われる時代の地球規模のエコロジー的連関を東アジアの視点からどう考えられるのか」——は、ASLE-Japanの基底にある問題意識と共通するのではないのでしょうか。学会員間はもちろんのこと、学会の外の動きとも協働して東アジアの環境文学・言説・表象研究を進めていくことの重要性を再認識したシンポジウムでした。

三番目に紹介したいのは中国の動きです。今年5月に広東外語外貿大学（広州市）に中日比較生態文学研究所が設立されました。研究所の所長で本学会員の楊曉輝教授は日本の環境文学の専門家で、ご自身の研究発表だけでなく、日本のエコクリティシズムの中国語翻訳にも精力的に取り組んでおられます。研究所が中心となって翻訳・編集された『日本生態文学前沿理論研究』には、野田研一『交感と表象』を主とする日本の環境文学研究の中国語訳が収められています。興味深いのは、「日本生態文学」（中国では、「環境文学」ではなく「生態文学」という言葉が使われています）として翻訳紹介されているものが、必ずしも日本文学を扱っているわけではないということです。ご存知のとおり、『交感と表象』ではアニー・ディラードやエドワード・アビーなど主にアメリカの書き手の作品が論じられ、そこから比較研究的に日本文学に関心が向けられています。中国語訳の対象として選ばれた日本のエコクリティシズムが、日本文学研究というよりもむしろ比較文学研究に関わるという事実には、比較研究を通してエコクリティシズムを深めていこうとする動きの連鎖が読み取れるのではないのでしょうか。

思えばASLE-Japanは設立当初から、正確に言えばそれ以前の設立準備段階から、比較研究とその基盤となる翻訳の重要性を強調してきました。

本学会は、英語圏の作品や研究を翻訳・紹介するだけでなく、日本の作品の英語翻訳にも取り組んできました。1996年8月にハワイで開催された日米ASLE合同シンポジウムで翻訳ワークショップが企画され、英語話者と日本語話者がチームを組んで日本の短編の

翻訳に取り組んだことを記憶している会員もいらっしゃることでしょう。ハワイで蒔かれた種は、その多くが土の中で発芽を待つ一方で、Bruce Allenさんの翻訳によるIshimure Michiko's *Lake of Heaven*のように美しい花を咲かせたものもあります。

翻訳ということで忘れてならない事実がもう一つあります。それは、本学会のこれまでの代表の多くが研究だけでなく翻訳でも重要な仕事をしてこられたということです。初代表の野田氏はエドワード・アビー、続く山里勝己氏はゲーリー・スナイダーの翻訳でそれぞれ知られていますし、村上清敏氏にはロバート・フィンチの作品のほか、トーマス・ライアン『この比類なき土地——アメリカン・ネイチャーライティング小史』といった重要な研究書の翻訳があります。前代表の管啓次郎氏に至っては翻訳家としてル・クレジオヤルドルフォ・アナーヤをはじめ多数の作家の作品を先駆的に紹介しておられます。

奇しくも代表のバトンを渡された9月初め、私は一冊の翻訳にかかりきりの毎日を送っていました。今から20年前に出版された*The Spell of the Sensuous: Perception and Language in the More-Than-Human World*という本です。エコクリティシズムや環境思想でよく用いられる“more than human”という言葉はおそらくこの本の著者David Abramの造語であると考えられますが、この用語は日本ではほとんど知られていません。もともと日本では人間と自然を分け隔てる発想がないから“more than human”という概念は目新しいものではない、という理由で注目されていないのでしょうか。理由はもっと世俗的なことだろうと思います。つまり、日本語訳がないから注目されていないのではないかと。外国語に長けた研究者の多い学術分野においても翻訳がいかに重要であるか——これは、日本におけるフェミニズム研究の発展が、故・竹村和子氏によるジュディス・バトラーやトリン・ミンハの翻訳に負うところが小さくないという事実を考えれば一目瞭然でしょう。

エコクリティシズムの必読書であるローレンス・ビュエル『環境批評の未来』やジョナサン・ペイト『ロマン派のエコロジー』が、それぞれ本学会員の伊藤詔子氏と石幡直樹氏を中心に翻訳されるなど、重要な取組みは継続的にみられます。比較研究と翻訳は今後ますます日本の、アジアの、そして世界のエコクリティシズムにおいて重要な役割をもつにちがひありません。翻訳と比較研究の重要性を今一度確認し、異分野・異文化の伸びやかな環境文学研究交流を深めていきましょう。

【全国大会報告】

第22回ASLE-Japan／文学・環境学会 全国大会報告

(2016年8月20日 [土] ~21日 [日] @AOSSA 福井市地域交流プラザ 6F
[福井県福井市])

2016年度の全国大会は、8月下旬に福井市において行われました。今回は院生企画（8ページに報告があります）、個人発表、シンポジウム、フォーラム、基調講演、そして廃止が議論されている高速増殖炉もんじゅなどをめぐったフィールドトリップに、有機的な連関が多くみられたことが印象的でした。五名の方に報告をお願いしました（写真は明記されていない限り、編集委員による撮影です）。

<第一日目：8月20日>

●個人発表

横田 由理（大東文化大学・非）

研究発表第一番目のジョン・リピー氏（滋賀県立大学）のご発表（“Environmentalism in the Satoyama of Poetry”）は、大会初日の主要テーマの一つであった「里山・里地」の基本的な概念が簡潔、明瞭に紹介され、その後の議論の幕開けにふさわしいプレゼンテーションであった。まず、里山の詩について述べられる前に午前中のテーマであった核の事故と里山とは深く関りがあるとの指摘があり、次にレジメに従って、ウィルダネスへの関与：野生と人間の領域の融和性：人間とウィルダネスの融合という問題のある認識：ウィルダネスというさらに大きくメタフィジカルな現実：ウィルダネスという概念を吹き込まれた家畜動物：人間と自然との協調：人間による自然崩壊：農業労働と農業従事者の理想化といった9つのテーマについて詳述された。

日本の詩の多くは第二の自然であり“encultured nature”である里山をテーマにしており、里山自体が深く日本文化と関り、日本の自然観に影響を与えてきた。しかし、それは自然への愛というよりむしろ基本的な曖昧性によって特徴づけられ、環境的な限界も露呈している。里山の詩は野生の生き物たちの自律性や高潔さを前景化し、野生を称賛しそれに憧れるが、人間以外の生き物は人の略奪の対象ともなる。また、農地という背景、題材の選択、言葉遣いなどの詩的要素に明らかなように、文学的文化的実践や慣行に深く浸透しており、生態系中心主義と共に人間中心主義を示している。農業生活の理想化され浪漫化された感傷的で表面的な扱いはさらに包括的な、自然を中心とす

る視点が必要である。人間の文化的空間は物質的な空間であり恣意的で利己的な人間の行動が肯定される傾向があるが、生態系中心主義的で包括的な視点と相互関係が図られるべきであるとの指摘が結論であった。

松尾芭蕉、小林一茶、与謝蕪村、正岡子規など多様な詩が紹介されたが、発表時間が限られており各々の作品を検討する時間がなかったのが残念だったが、多くの例が紹介されたことでレジメを基に各自がゆっくり吟味する楽しみもできた。質疑応答では里山の再生や保存についての取り組みにも触れられ、当日のフォーラム「越前の里山とコウノトリ・プロジェクト」へ続くものとなった。

続いて二つ目の研究発表は、小沼純一氏（早稲田大学）の「音楽は自然を表象しうのか ひとつの提起として」であった。音楽における自然表象、それはタイトルという言葉を通してであったり、音階、リズム（音楽的な文法でありシンタックスであると指摘された）などを介してであったりするが、その表象には共通の背景やイメージの共有など、一つの文化圏への帰属や表現されたものへの共通感覚が必要であると指摘された。音楽の中で表現される形態、動き、イメージはベルクソンの時に時間の中で変遷し、音楽の神秘は時間、空間のつながりの中に存在するとし、生き物の反応や人間の五感で感じているものを本当に言語化できているのかという疑問にも通底する種を超えて音を共有することの意義を示唆された。中世から現代まで西欧からアジアに及ぶ広大な時間と空間の中で展開された人と自然と音楽の関係をコロナフスキイからガムラン音楽、中村雄二の哲学などを多彩に援用して検証され、また、音楽を消費している現代への危惧も吐露された。院生企画の『チェルノブイリの祈り』で取り上げられた「物語」にならないものを表象する力を音楽が持ち得るか、という問いにもつながる貴重なご発表であった。

●シンポジウム1「自然へのまなざし—— 19世紀ドイツ語圏の環境と文学」

●フォーラム「越前の里山とコウノトリ・ プロジェクト」

三宅 由夏 (東京大学・院)

エコクリティシズムがもともと近現代英語圏文学を中心に発展してきたことを思うと、今回の大会一日目におけるシンポジウム「自然へのまなざし——19世紀ドイツ語圏の環境と文学」とフォーラム「越前の里山とコウノトリ・プロジェクト」は、エコクリティシズムの多様な可能性を示唆するとても画期的なものだった。と同時に、エコクリティシズム初学者の私にとっては、あまりにもさまざまな水準の問いを孕んだ濃厚な時間でもあった。要約することで失われてしまう細部を伝えきれない歯痒さをおさえつつ、以下でその報告を試みたい。

四名のドイツ語圏文学の専門家によるシンポジウムは、ゲーテの時代から19世紀中葉までのドイツ語圏環境文学が自然環境と人間的営為のバランスをいかに模索していたか、という問いを中心に展開した。外山知子氏(明治学院大学・非)は、ゲーテの『ファウスト』における四大元素(+死後の再生を助ける第五元素)が、主要人物たちの「再生」(あるいは「再生」の不可能性)といかに関わりを持っているのかを、作家の史実に基づいたテキストの読みをとおしてドラマティックに示された。つづく磯崎康太郎氏(福井大学)の発表では、自由主義の台頭する19世紀前半のドイツ語圏において、都市部と山間部の中間領域である「里地」がいかなる意味をもっていたのかが、スイスの作家G・ケラーの短編集『ゼルトヴィーラの人々』の物語展開とともにスリリングに示され、ドイツ語圏のリアリズム文学についてしばしば見られる「あまり近代的でなくリアリスティックでない」という指摘にたいする見直しが促された。岡崎朝美氏(北星学園大学・非)による発表は、施業林を扱う書であるザーリッシュの『森林美学』が目指したものを、そこに引用されているスイスの詩人C・F・マイヤーの『岩壁』という詩の改稿過程に着目することから紐解くという、繊細かつアクロバティックなものだった。そこにみられたのは人間による自然の「説明」ではなく、外界の風物と自己の内面の一致という、自然と人間の近接だった。松岡幸司氏(信州大学)はオーストリアの作家A・シュティフターの1842年と1866年における自然現象の観察・体験を綴ったエッセイを取りあげながら、ネイ

チャーライティングをとおして作家のうちに達成されたく「交感の原理」の深化が、カントの「崇高」概念をとおしても読みとれることを鮮やかに示された。また、シュティフターと同時代の作家ソローを比較したとき、前者が「故郷」という場所において「交感の原理」を深化させたのに対し、後者がまだ見ぬ本当の「場所」を求めて森へ入ったという興味深い指摘もあった。

四名の発表は各々に自律性の高い発表だったが、他方で岡崎氏から、外山氏がファウストの土地と死についての記述として引用した「留まれ、お前はなんと美しいのだ!」という有名な一節がザーリッシュ『森林美学』では森林ではたらく人々の意識を高めるために引用されているという指摘や、そのザーリッシュに影響を受けたシュテルプという森林学者が今最も注目している作家が松岡氏の発表で扱われたシュティフターであるという指摘があり、相互に関連しあう様子が垣間見られて豊かな森をみているような気持ちにさせられた。



つづくフォーラムも、都市部と山間部の中間領域である「里地」という磯崎氏の発表の余韻のもと拝聴することになった。福井県越前市の里山を中心に展開している「コウノトリ・プロジェクト」を支えている野村みゆき氏(福井県安全環境部主任)と西垣正男氏(越前市環境学習施設指導員)による報告は、昭和46年の時点で絶滅していたコウノトリをふたたびこの土地の「象徴」として蘇らせることで、コウノトリを頂点とした生態系ピラミッドを復活させるというめまいがするほど壮大なものであり、驚くべきことに越前は開始十五年目に実際にコウノトリが舞い降りる土地となり、その過程で地元の人たちが自らの土地についての意識を少しずつ確実に深化させてきた、ということだった。「失われた「故郷」の復元」ともいえるこのような実例があること自体、無数の未来への可能性と、そのプロセスが孕む同じく無数の歴史性への問い

を提起している。今もたゆまぬ努力が続けられているお二人の福井弁の声が、いま見ている世界のなかにも鳴り響いているように思う。



<第二日目：8月21日>

●個人発表

今村 隆男（和歌山大学）

森林伐採大国だったイギリスでは、逃げ場を失った狼は18世紀半ばに絶滅し文献にしか登場しない存在だったが、一方、明治期の日本において羊は現実には見ることの稀な生き物で、牧歌は想像上の世界だった。イメージの中で生きていたこれらの動物達が博物誌や様々な関連文献においていかに描写され変貌を遂げていったのかを比較文化論的な視点から論証したのが、今回のお二人の発表である。

二日目の最初の発表者の高橋実紗子氏（聖心女子大学・院）は、19世紀にはいって国民的熱狂の対象となってゆくイギリスの博物誌などの文献に「雪原で人間を襲う狼」のイメージが頻出することから話を始める。「カニス・ルプス」はリンネによる二名法における狼の名称であり、リンネは創造主を賞賛するために万物を正確に把握して科学的に分類する手法をとった。一方、「雪原の狼」のイメージの直接のルーツになったトムソンの『四季』はリンネの著作がイギリスに入ってくる前の作品で、博物誌は当初から科学と文学（物語）を共存させていたことになる。高橋氏によれば、「雪原の狼」に関する記述のルーツを遡るとロシアの民間伝承などに行き着くが、その強烈な印象によって物語の発展の中で次第に狼は恐怖の対象としての役割を担っていった。ヴィクトリア時代になると狼は絵本や宗教文学、絵画などにも顔を出すようになり、そのイメージは拡散して読み手のニーズに応じて姿を変えていった。狼が人々の恐怖心と結びつくようになった

理由は「雪原の狼」の物語性だけではなく、アングロ・サクソンの時代から狼と共存して来た民族としてのアイデンティティにも関わっていると言う。狼は、いわば外来種でもあり在来種でもあったのだ。イギリスにおける狼の絶滅の時期と、ペナントらによって博物誌が隆盛し始めた時期とがほぼ同じだったことは重要である。想像の中での狼のイメージの再構築が可能であったのは、狼がすでに絶滅してしまっていたがゆえにその存在が捉え難かったからだという。



家畜の羊は人間文化の産物であって野性の狼とは対照的な動物だが、日本においては羊、或いは牧歌や牧場の問題は狼と共通項を持つ。二番目の発表者の江口真規氏（秋田県立大学）はまず、牧歌の定義と古代ギリシャに始まる歴史を確認した後、漱石が明治期の日本に牧歌をいかに紹介したのかを説明する。英文学者だった漱石は牧歌がどのようなものであるのかを理解していたが、その漱石にしても、イギリス人は「殆ど自然に対して何等の趣味をも認めざるが如し」と一面的な評価しかしていなかったという。羊のいる実際の風景を日本に移植することが簡単ではなかったのと同じように、気候風土や自然観の異なる地域の文学や芸術を理解することは難しかったということだろう。この困難さは明治以降も変わることは無く、牧歌は日本独自の発展を遂げていった。戦前の政治的利用などを経て、戦後においても牧歌や牧畜はレジャー文化などへと継承されつつ、都市生活との対比の中で特定のイメージが形成されていったと江口氏は分析する。

目の前には存在しないという共通項によって、これらの動物が東西において文化的、そして社会的な規範の構築に利用されてきたことが、詳細な資料の分析を通じた研究で明らかにされた。今回、狼と羊という一対となる動物をテーマとしてお二人が取り上げられたのは偶然だろうと察するが、そのことが動物の文化的表象をめぐる問題をより深く考えることに我々を導いたのではないかと思う。

●シンポジウム2「原発・原子力と文学」

澤田 由紀子 (甲南大学・非)

2日目のシンポジウム「原発・原子力と文学」は、まずは和氣久明氏(アマースト大学)「中上健次と原発」の発表(米からのSkype中継による)で始まった。公的に反核を表明している中上健次が、その宣言以前に書いた小説から反原発をどのように表現したのかを探り、中上がフィクションと現実の間でどのような統一したビジョンを思い描いていたのかを考察するものである。中上の「火まつり」から小説に描かれた主人公達男の人物造形と原発立地に関わる住民の状況そして主人公達男の一家惨殺・自死に至る構造の中に、現実の事件や原発立地計画の背景を織り込むことで、達男の事件は現世への異議申し立ての意かつ自然を前にしての人間中心主義の否定という側面を持ち、「悪」の側からの憎悪として描かれているとする。現実には紀伊半島に原発が実現に至らなかった背景として文化的辺境ではないという点を指摘し、中上は、小説家として原発に対抗しうる方法は作品の内部に組み入れることで可能になると考え、死後ではあるが、彼の芸術上の実践が将来において現実の結果につながったのだとする。次は小谷一明氏(新潟県立大学)「原発のある風景～水上勉『故郷』を読む」で、若狭を出身地とする水上勉が『故郷』で、若狭湾に臨む地域に住む人々、そして戻ってきた人々がその場所をどういう風に考えているのかを語りから浮かび上がる地域を捉え、何故若狭湾に原発が集中したのか、如何に原発の或る風景の中で生きているのかを考察する。明治以降からの「裏日本」という言葉による日本海側の衰退と大都会に文化まで搾取され森と物語が消えていく過程が故郷に対する思いとして描かれているとし、そして原発立地後「difference(差異)が蒸発してしまってindifference(無関心)が街を覆っている(矢部史郎)」村の変化の特性として「無音化」を取り上げ、水上の「金槌の話」に大都会が原発立地の音を奪い取る構図を見る。そしてこのような力に抗う村の側の力として「記憶」を用いて原発地での異変に対抗しようとしていると指摘した。続いて松永京子氏(神戸市外国語大学)が「ハンフォードをめぐる汚染の言説と先住民表象」と題して、まず1949年「グリーンラン実験」が行われ放射能汚染されたハンフォードやその近郊で生まれ育った北西部の作家、デボラ・グレガー、テリ・ハイン、キャスリーン・フレニケン、等における核汚染に対抗する言説が先住民の声をどれほど反映しているかについてまとめられた。これらの作家の言説の中に

は放射能汚染への言説はあっても先住民を「消えゆくアメリカ人」(“Vanishing Americans”)として見る傾向があることを指摘し特にその傾向の中で、テリ・ハイン『アトミック・ファームガール』ではより積極的に、汚染による父の病気や隣人の死と土地を奪われた先住民へ共感を示し自らをその中に位置づけていると紹介するが、しかしそこには「文化の盗用」(“cultural appropriation”)問題があることを指摘する。最後にシャーマン・アレクシーの詩「世界の終わりのパウワウ」に描かれた遡上するサーモンの姿に「許し」を見る視点に言及し、ハンフォード以前から環境的不公正を受けてきたアメリカ北西部先住民の現状を知る契機としてこれらの作家の先住民表象を考察することが現実の先住民の「声」に接続する可能性を指摘している。



最後に中川僚子氏(聖心女子大学)が「カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』の問題領域」と題して、直接的に原発・原子力への言及のない作品にそうした表象が描かれているという読みの提示をされた。その契機として広島市立第一女学校の慰霊碑と中曾根康弘句碑の二つの石碑の、現代に継続するものとして見る二つの事例を挙げ、過去と思っていた出来事が進行形の経験として今まさに起きていることを思い出させるモノとして機能しつつ静かな怒りを表明するものであること、また記憶を伝えるモノのもつ力に言及した。カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』がもともと核兵器に遭遇する作品として構想された背景に触れつつ長崎出身のイシグロの作品に頻出する廃棄物のモチーフは実は作家に底流する原爆モチーフであると見た上で、この『わたしを離さないで』においても廃棄物についての小説として読むことで、廃棄物として運命づけられた主人公が、しかし生きてきた痕跡を残そうと自分にしか語れない物語を紡ぎ、記憶として伝えようとする姿に広島における静かな怒りと、そして自分が信じるものの為に生き続けることに対する祈りのような希望を見ていくものであった。質疑は4人に共

通したテーマ「記憶」について言及されそれぞれの発表における「記憶」の意義を再確認し、また問題点も指摘され、シンポジウムは統一感の中で締めくくられた感があった。

●基調講演「原発を止める！——原発訴訟の最前線から」

●フィールドトリップ（中池見湿地、関西電力美浜発電所、日本原子力研究開発機構高速増殖炉もんじゅ）

平塚 博子（日本大学）

2016年度の全国大会2日目午後のプログラムである基調講演とフィールドトリップは、どちらも原発に関するもので、大会の締めくくりとしてふさわしい充実した内容のものとなった。基調講演には40名ほどが出席し、原発の差し止め訴訟に関わった笠原一浩氏（大飯原発差し止め訴訟福井弁護団事務局長・弁護士）と高橋陽一氏（福井原発訴訟滋賀弁護団・弁護士）を講師に迎え、浜本隆三会員の司会で行われた。「文学からみた原発訴訟：原発を止める原発訴訟の最前線から」と題して、両講師には原発訴訟の最前線について刺激的なお話を聞かせていただいた。お二人が共通して指摘するのは、福島第一原発がその後の原発訴訟に与えた影響である。

最初のスピーカーの笠原氏は、大飯原発3、4号機運転差し止めを決定した福井地裁の決定は、住民の声より行政の決定を優先してきた3・11以前の司法判断に変化が生じてきた例だと述べる。さらに、原発訴訟をはじめとする公害訴訟では、いかに深刻な被害を受けたかについて被害者自身が証言しなければならず、そのプロセスは文学的な営みと類似すると、笠原氏は指摘する。当事者の主張をもとに審理が行われる公害訴訟において、優れた裁判官は当事者が提出した文書を熟読して審理に臨むものであり、福井地裁と大津地裁の決定は裁判官と当事者間で理想的な文書の交換がなされた結果だと、笠原氏は述べる。

二人目のスピーカーの高橋氏には、福井原発差し止め決定にいたる経緯を説明していただいた。高橋氏によれば、直後に効果が生じる仮処分という方式を訴訟団があえて選択して提訴したにも関わらず、申請から決定まで審理は2年以上に及んだという。この大津地裁の仮処分決定は日本で初めて稼働中の原発を止めたというだけでなく、この決定によって今後市民の声と裁判官の正義がコラボして原発を廃止する道筋が見えたという点で、その意義は大きいと高橋氏は指摘する。

また高橋氏は福島第一原発事故が、これまで行政判断尊重論を貫き、専門領域に関する判断を留保してきた裁判所の姿勢を変える契機になったとも語る。

笠原・高橋両氏による講演のあとに行われたフィールドトリップも、環境と原発について考えさせられる実り多き内容となった。福井駅をマイクロバスで出発して、まずは福井ではじめてラムサール条約に登録された中池見湿地を訪れた。



（撮影：澤田由紀子）

美しい里山を散策し福井の自然の豊かさを参加者全員が実感したあとは、またバスに乗って施設付近から美浜原発と高速増殖炉「もんじゅ」を見学した。どこまでも砂浜が続く美しい日本海の海岸線にそびえる巨大な二つの人工物は、自然と文明の共存の難しさを含め様々なことを参加者に考えさせる光景であった。また、車中では浜本会員による福井県の原発に関するミニレクチャーがあり、トイレ休憩のSAで絶景の夕日を見たり、見学以外にも隅々まで配慮の行き届いた、参加者30数名全員が大満足の旅となった。大会最後の二つの行事を含め大会全体の準備と運営に携わられた浜本会員のご尽力に、心からの感謝を申し上げて報告を終えたい。



（撮影：平塚博子）

ASLE-J Grad Journal (院生組織だより)

「ASLE-J 全国大会 院生企画報告」

戸谷 洋志 (大阪大学・特)

今年度のASLE-J全国大会において、院生組織は「院生企画 クロス・レビュー」という題名で企画を行った。企画の趣旨は次のようなものである。

現在、院生組織に在籍する大学院生の専門領域は多様化しつつある。そうした多様性をポジティブに活かしながら企画を構想した場合、最適であるのは、一冊の書籍を多様な観点から批評することであると考えた。同時に、テーマに用いる書籍は、そうした多様な観点からの解釈を許容しながら、本大会の全体テーマと軌を同じくするものであることが望ましい。こうした諸条件を省みた上で、スベトラーナ・アレクシェービッチの著作『チェルノブイリの祈り——未来の物語』をテーマにすることに決めた。選書の理由としては、前述の諸条件を満たすことに加えて、著者が2015年のノーベル文学賞を受賞しているため、今日の世界的な文学の動向をも視野に収められると考えられたからである。

当日レビューを行ったのは、戸谷洋志 (大阪大学・院 ※8月当時)、村瀬里紗 (中央大学・院)、青田麻未 (東京大学・院)、三宅由夏 (東京大学・院) の4名である。それぞれ、専門領域は哲学、社会学、美学、文学であり、各人がまったく異なった観点から自由な批評を行った。また、会場との質疑応答では、同書の翻訳事情などによるテキスト解釈の難しさから、悲劇と記憶の関係、日常性と想像力の関係など、普遍的な問題にまで議論が波及していった。



(撮影：豊里真弓)

同大会のシンポジウム2では「原発・原子力と文学」、基調講演では「原発を止める！——原発訴訟の最前線から」、さらにフィールドトリップとして高速増殖炉もんじゅ等の視察と、原子力をめぐるプログラムが充

実していたため、それらのいわば“前哨戦”として、本企画が先生・研究者の方々に楽しんでいただけたら幸甚である。

「『既視の街』へ」

笠間 悠貴 (明治大学・院)

分厚い雲に覆われた曇り空のもとに、暗く澱んだ運河が水を湛えている。そのほわりにはコンクリート壁の古い倉庫群が立ち並び、視線の遠く先に橋がかかっている。

金井美恵子と渡辺兼人の共著『既視の街』は、写真と文章によって構成された小説で、上記のような風景のモノクロ写真が最初の章に収められている。金井のテキストにはいくつかのモチーフが繰り返し出てくるのだが、それらが渡辺による55枚の写真とゆるやかに調和して、本来無関係であるはずの風景がまるで小説の中に描かれた風景そのものであるかのような印象を与える。冒頭に出てきた写真と符合する描写が、主人公の夢のシーンに登場する。

わたしは橋を通りすぎ、太陽は頭上から光と熱気を降りおろすので、全身に汗を吹き出しながら、植物が金属的な凶器のようにあるいは金属的な猥褻さで生い茂る無風の熱気のなかを、川沿いに小さな工場と灰色の倉庫の並ぶ無表情な夢の中を歩く。(59頁)

主人公の夢の中の街へと行ってみたいと考えた。ここで私は、撮影された場所を特定する作業に取りかかった。その写真には、目を引く被写体も、目印となる建物も、場所を示す文字もない。運河と橋と倉庫の配置だけを頼りに、1976年の航空写真をくまなく探すしか方法はなかった。想像を働かせて東京の運河をひとつひとつ辿っていく。何日もかけてようやくそれと思われる場所を地図上に見つけることができた。かつて飴工場だった倉庫は、現在も残っているが改装されておしゃれなカフェになっている。今なお人々が行き交い、変貌を続ける場所だ。写真の対象は、具体的な時間と場所を持つ。だからこそ少ない情報からでも、何とか割り出すことができた。にもかかわらず実際訪れたその場所は、写真に収められた風景とは似た別の場所のようにしか感じられなかった。40年の歳月がそうさせたのだろうか。写真と場所の間に生じたズレが何なのか言い当てようとしても、夢を思い出そうとするときのように取り逃してしまう。そのことを確認するための小さな旅行になったのだった。

※金井美恵子・渡辺兼人『既視の街』(新潮社、1980)

【学会報告】

ACCUTE年次大会 (28-31 May 2016 @ University of Calgary)

大田垣 裕子 (兵庫県立大学)

ASLE-Japanから北米ロマン派学会とACCUTE (カナダ高等教育英語学会) 共催の学会案内をいただき、今年5月末に参加しました。会場のカルガリー大学では同時期にこれを含む70以上の学会が集まり、CFHSS (カナダ人文社会科学学会) 大会が開催されていました。共通テーマ“Energizing Community”のもと、各学会メンバーだけでなく一般に公開されている講演やイベントも数多くありました。

上述の共催パネルのテーマは“Romanticism and the Anthropocene”でした。人新世 (Anthropocene) の始まりは初期ロマン派作家たちが活躍した1790年代まで遡り、ワーズワスのソネット“The world is too much with us”に見られる資本主義・自然軽視批判は人新世に大きな影響を与えてきました。昨年パリで開かれたArtCOP21での展示作品とロマン派の関係、メアリー・ウルストンクラフトとパーシー・シェリーの言説に読み取れる反啓蒙主義的ジェンダー批判、フランクリンの北極探検失敗とメアリー・シェ

リーの*The Last Man*からみる大英帝国が“ecological dismemberment”に果たした役割、コールリッジの初期作品における人間中心主義批判等について議論されました。

また、私が参加した“Walking”のパネルではモントリオール第3のスペース (歩道・公園等) を舞台にした異なる言語グループの人々の歩行と出会い、作品に登場する主人公の思春期の少女たちが街や郊外を歩くことによる社会的な居場所の探求、近代ヨーロッパと明治日本の歩行文学比較から歩行活動の革新性について話し合われました。

ACCUTEではその他80以上のパネルが開期中に行われましたが、最終日の“Research in Indigenous Young People's Cultures”等のラウンドテーブルでは学会メンバー以外に地元の先住民やアーティスト等が参加し、希望者はメールアドレスを伝えれば今後も最新情報を受けられるシステムであったのが印象に残っています。

【学会報告】

SES-J / MESA合同大会 (2016年8月6日@大東文化会館)

林 千恵子 (京都工芸繊維大学)

8月6日(土)にエコクリティシズム研究学会 (SES-J) と多民族研究学会 (MESA) の合同大会が大東文化会館で開催され、四つの研究発表、シンポジウム、特別講演などが行われた。

午前の研究発表では、夏目康子氏が、19世紀から20世紀初頭に出版されたアイリッシュ・アメリカンの歌における祖国表象の変化を論じ、デビッド・ファーネル氏が、Ursula Le Guin作品のユートピアと暗黒郷をエコクリティシズムの視点で論じた。また、清水菜穂氏はJames Baldwin作品の「地下」表象と「兄弟モチーフ」に着目して、作品に満ちるアフリカン・アメリカン文学のエネルギーを示し、カトウ・ダニエラ氏は南方熊楠の思想をもとに、自然と translation (変容、翻訳) の本来的繋がりを指摘し、翻訳がもつ可能性を示した。

午後のシンポジウム「クロス・エスニックの文学とエコクリティシズム」では、4名の講師が、環境汚染や搾取に立ち向かう民族の声に着目した。平尾吉直氏はナイジェリア政府による資源搾取と環境汚染に抵抗した少数民族作家Ken Saro-Wiwaを取り上げ、松

永京子氏は北米先住民作家L. M. Silkoの*Almanac of the Dead*について、環境汚染に対抗する汎部族的アクティヴィズムを提示する作品として論じた。一谷智子氏は、核実験で被爆したオーストラリア先住民を描くTrevor Jamiesonの*Ngapartji Ngapartji*についてエコ・コスモポリタニズムの可能性を論じ、梶原克教氏は、現代のツーリズムと植民地主義の相同性を指摘し、理想化不能な風景を前にしたカリブ作家の言説に迫った。最後に“Ecocriticism and the Psychology of Information Processing: Taking a Seat at the Table”と題してスコット・スロヴィック氏が講演を行い、文学研究者が現在の世界で果たすべき役割等を語った。

各発表からは、エコクリティシズムと多民族研究とは何を研究し、持ち味は何かが明確に伝わり、シンポジウムでは、各分野の知見とアプローチ法を活かして、一つの問題に共に向き合ったとき、新たな知の地平が見える醍醐味を実感することになった。講演後には、居合道演武 (岸本寿雄氏) と空手 (真野剛氏) の披露も行われ、充実した一日の締めくくりとなった。合同大会の可能性が最大限に引き出される機会となった。

【ご著書紹介】

藤江啓子『資本主義から環境主義へ—アメリカ文学を中心として』
(エコクリティシズム研究のフロンティア 6)

(英宝社、2016年8月)

8月に出版されたご著書について、会員の藤江啓子さん(愛媛大学)にご紹介をお願いしました。

本書はエコクリティシズム研究学会によるエコクリティシズム研究のフロンティアシリーズの一つとして出版された。利潤優先の近代資本主義が工業化、産業化、都市化を促し、環境破壊への道となり、環境主義へと移行していく軌跡を主にアメリカ文学に辿るものである。17世紀にイギリスで起こったピューリタン革命と資本主義革命、18世紀の産業革命がアメリカに影響を及ぼし、今日ではグローバル化による環境破壊で、周縁の地、ニュージーランドの先住民の生活までもが脅かされていることを、文学作品に見る。歴史的に長いスパンを扱い、イギリスからアメリカ、そしてニュージーランドとグローバルな視座で考察した。工業化にともなう労働環境の問題を移民やジェンダーの問題と絡め取り論じ、また、ケープコッドなどアメリカ景勝の地における環境問題を論じた。取り上げる作家も、



イギリスのジョン・ミルトン、ニュージーランドのイアン・ウェッドとアメリカ以外の作家も扱った。アメリカでは、ソロー、エマソン、メルヴィル、ホイットマン、クレヴクール、レベッカ・ハーディング・デイヴィス、ロバート・フィンチなど多数の作家を論じた。大風呂敷を広げた感もあるが、大きなテーマをコンパクトにまとめたつもりである。

文献情報 (～2017年2月)

- [2016年1月] David Herman (ed), *Creatural Fictions: Human-Animal Relationships in Twentieth- and Twenty-First-Century Literature* (Palgrave Macmillan) ● Elizabeth Swanstrom, *Animal, Vegetable, Digital: Experiments in New Media Aesthetics and Environmental Poetics* (U of Alabama P)
- [2月] 上岡克己『世界を変えた森の思想家——心にひびくソローの名言と生き方』(研究社)
- [3月] Dewey W. Hall (ed), *Romantic Ecocriticism: Origins and Legacies* (Lexington) ● Jesse Oak Taylor, *The Sky of Our Manufacture: The London Fog in British Fiction from Dickens to Woolf* (U of Virginia P)
- [4月] ギュンター・アンダース『核の脅威——原子力時代についての徹底的考察』(法政大学出版局) ● 小沼純一『音楽に自然を聴く』(平凡社) ● 除本理史『公害から福島を考える——地域の再生をめざして』(岩波書店) ● Robert S. Emmett, *Cultivating Environmental Justice: A Literary History of U.S. Garden Writing* (U of Massachusetts P) ● Morten Tønnessen, et al. (eds), *Thinking About Animals in the Age of the Anthropocene* (Lexington)
- [5月] 塚谷裕一『森を食べる植物——腐生植物の知られざる世界』(岩波書店) ● ジャン＝マルク・ドルーアン『昆虫の哲学』(みすず書房) ● Melissa Brotton, *Ecotheology in the Humanities: An Interdisciplinary Approach to Understanding the Divine and Nature* (Lexington)
- [6月] Heather Houser, *Ecocriticism in Contemporary U.S. Fiction: Environment and Affect* (Columbia UP) ● Chris Pak, *Terraforming: Ecopolitical Transformations and Environmentalism in Science Fiction* (Liverpool UP)
- [7月] 今福龍太『ヘンリー・ソロー 野生の学舎』(みすず書房) ● デビッド・A・ナイバート『動物・人間・暴虐史——“飼い貶し”の大罪、世界紛争と資本主義』(新評論) ● フレッド・ピアス『外来種は本当に悪者か?——新しい野生 THE NEW WILD』(草思社)
- [8月] 森元良太/田中泉吏『生物学の哲学入門』(勁草書房)
- [9月] Donna J. Haraway, *Staying With the Trouble: Making Kin in the Chthulucene* (Duke UP)
- [10月] Robin L. Murray and Joseph K. Heumann, *Monstrous Nature: Environment and Horror on the Big Screen* (U of Nebraska P)
- [11月] 野田研一/奥野克巳(編著)『鳥と人間をめぐる思考——環境文学と人類学の対話』(勉誠出版) ● 野田研一/山本洋平/森田系太郎(編著)『環境人文学 I—文化の中の自然』『環境人文学 II——他者としての自然』(勉誠出版) ※前号より修正
- [12月] Ursula Heise, Jon Christensen, and Michelle Niemann (eds), *The Routledge Companion to the Environmental Humanities* (Routledge)
- [2017年2月] John Ryan, *Plants in Contemporary Poetry: Ecocriticism and the Botanical Imagination* (Routledge)

【シリーズエッセイ 風景のカタチ(1)】

北海道、開拓写真のこれから

中村 絵美 (美術家)

掛川源一郎氏(1913-2007)の写真集を手にとったのは、東京に出ていた23歳の夏だった。絶版でほとんど手に入らない代物だったのだが、帰省時に実家の隣の家に遊びに行ったら、何とはなしに置いてあった。あとがきに、子供のころから良く名前を聞いていた近所のおじいさん達の名を見つけた。河東篤(生没年不明)と澤博(1924-2012)。河東先生は祖母のかかりつけ医、澤氏は祖父の麻雀仲間だった。



26歳の時、徳島での短期の仕事を終えて北海道に戻った。まずは友人から札幌の小さな出版社を紹介され、数ヶ月だけアルバイトとして使ってもらった。ある日社長から「あなたが持っていた方がきっといい」と、『長万部——熱き鼓動』という長万部町発行の本を手渡された。澤氏ほか何名かの写真が使われた、町の開基120周年を記念した写真集だった。

その後、短期の仕事を見つけて長万部に戻った。仕事の取引相手のSさんという男性と出会い、ふとした話題から、若い頃に『長万部——熱き鼓動』の編集に携わり、澤氏のネガを扱ったという話が出た。数十年前にすっかり終えた仕事だが、澤氏の写真が気に入り、コンタクトシートはまだ保管してあるのだという。事務所にお伺いし見せていただいた澤氏の写真は、今では決して撮れないだろう、市井の人の暮らしを繊細に切り取ったスナップだった。

長万部での仕事が終わろうとしていた頃、澤氏の娘Kさんにお会いしに行った。

Kさんに、澤氏の写真部屋がまだ残っているからと案内してもらえた。雑誌類は最近軒並み燃やしてしまったところだと言う。部屋のあちこちに置いてあるプリントには、明らかな家族写真も混ざっているが、写真作品も沢山ある。棚の一角から台紙付きのプリントの塊を見つけた時、心が動いた。台紙の右下には、「長

万部写真道場」と朱印が付いている。咄嗟に、写真を借りたいのですがとお願いした。Kさんは面白がって、いらぬものは捨ててもいいからと、目に見えるところにある全ての写真を貸してくれた。その一週間後に、次の仕事のため、私は大量の写真を抱えて町を出た。



札幌の写真家、露口啓二さんの勧めで、現在「長万部写真道場研究所」というグループと、ホームページ(<http://occ-lab.org/>)を開設している。ホームページでは調査や複写作業の進捗を報告しつつ、仲間内ではウェブの写真共有サービス「Flickr」を利用して、複写した写真のデータを閲覧してもらっている。この活動を始めてから約一年後の今、まだ未整理の澤氏の写真を、掛川さんの未発表プリントと合わせてアーカイヴできないかと、本格的に準備をしているところだ。彼らの写真を、明治初年前後から写されてきた開拓写真とひと続きに見るとき、1時代、1作家、1テーマ、1枚ずつで鑑賞、評価されるような写真作品という枠を超え、写真を通じて「北海道」という場所のシーケンスを、緊密に感じられるものになるだろう。和人の私たちの暮らし、私たちが大きな力で排斥していったアイヌの暮らし、それらが混じり合ったもの、さらには原生の自然景観までもが開拓写真に見出せる。

私たちの住むこの土地、開拓写真が撮られる前、撮られた後の風景の断絶について、考えさせる力が開拓写真にはある。時代の連なり、文化の連なり、人の連なり、それらの延長としての現代北海道を指し示す力が、開拓写真にはあるだろうと思う。

.....

あるモノやコトを通して新しい風景に導かれることがあります。本シリーズでは、様々な方に風景への入り口やそこにある風景のカタチについて語っていただきます。

事務局より

■2016年度ASLE-Japan／文学・環境学会
第二回役員会・総会のご報告

2016年8月20日(土)、21日(日) AOSSA福井市地域交流プラザ 6F(〒910-0858 福井市手寄1-4-1)において文学・環境学会全国大会が開催され、それに先立って第二回役員会、翌日総会が開かれました。まず、審議事項として、2015年度会計報告および監査報告、2016年度予算案の審議がなされ審議の結果、承認されました。引き続き、一部役員改選案、院生組織のウェブサイト開設、終身会員、「エコクリティシズムが学べる大学・大学院」ウェブサイト掲載規定が審議を経て了承されました。続いて、会誌及びニューズレターの発行、現会員数(198名)、院生組織の活動、以上の報告がありました。ニューズレター41号に8月の大会報告や新企画を入れる予定のため11月末発行となり、発送は会誌と合わせて12月第1週とすると報告されました。次年度より、会誌の10月末発行に合わせるようになりました。

■2017年度ASLE-Japan／文学・環境学会
全国大会開催のお知らせ

と き：2017年8月下旬～9月上旬の平日を予定

ところ：清泉女子大学

(〒141-0022 東京都品川区東五反田3-16-21)

大会実行委員：ブルース・アレン(清泉女子大学)

*プログラム、スケジュールの詳細につきましては決まり次第、会員メーリングリストでお伝えします。たくさんの方々の参加を心よりお待ちしております。

<会費納入のお願い>

2016年度の年会費(一般5,000円、学生2,000円)の納入をお願いいたします。

ゆうちょ銀行
口座番号 01300-0-93821
加入者名 文学環境学会
(フリガナ：ブンガクカンキョウガクカイ)

<終身会員制度をご活用ください>

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。現在、8名の先生方が終身会員となっております。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

<会員情報の訂正・更新について>

会員の皆様へお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに事務局補佐・辻(twain1910★gmail.com)までご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

広報より

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/>

今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の塚田幸光(hiro2827★gmail.com)までお送り下さい。次回の更新は2017年5月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せ下さっている先生方は、どうぞ新しい情報のみをご連絡下さい。できるだけ多くの方々からのご連絡をお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

ASLE-J 広報委員 喜納育江、塚田幸光、松永京子

編集後記

ニューズレター第41号をお届けします。今年も終わりが近づいてきましたが、皆様にとって2016年はどうのような1年だったのでしょうか。今年はいギリスがEU離脱を選択し、今号編集中にはアメリカ大統領選が行われ、社会の何かが変わりつつあるように思えます。

結城新代表の巻頭言はアジアにおけるエコクリティシズムの新しい動きに関するものですが、同時にASLE-Japanの来し方も語られており、読み応えのあるものです。ぜひご一読ください。ニューズレターでは、今号から新しいシリーズエッセイ「風景のカタチ」の連載を始めました。本シリーズでは、様々な方に風景をめぐって語っていただく予定で、第1回は北海道在住の美術家、中村絵美さんに北海道の開拓写真をめぐるエッセイを寄稿していただきました。今号では会員による著書紹介のコーナーも設けており、また前号に引き続き「文献情報」も掲載しています。会員諸氏のお役に立つことを願っております。どうぞご活用ください。

(C・A)

ニューズレター編集委員会では、会員の皆さまからのご寄稿(エッセイ、批評、書評など)、イベント・文献情報を随時募集しています。詳細については各編集委員にお問い合わせ下さい。



【発行】
代表 結城正美
事務局 長岡技術科学大学 高橋綾子
〒940-2188
新潟県長岡市上富岡町1603-1
Tel/Fax: 0258-47-9805 (直通)
E-mail: tayako★vos.nagaokaut.ac.jp

【編集】
編集代表 千里金蘭大学 浅井千晶
〒565-0873
大阪府吹田市藤白台5-25-1
Tel:06-6872-7945 (直通)
Email: c-asai★cs.kinran.ac.jp